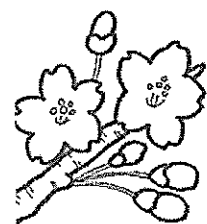


コラム



# 戦略的

春になると穏やかな陽射しを待ちかねたかのように植物たちが一斉に花を咲かせる。梅や桜はもちろんのこと、桃、アカシア、菜の花に水仙と次々と花が咲く。そして、その花を目当てに蜜蜂や蝶たちが次々にやってくる。普段は灰色の都会も、この時ばかりは公園の片隅や軒先の花壇が華やぐ。新しい命が萌える瞬間はいつも美しい。学校では入学式、会社では入社式と門出を祝う光景も見られる。まだ大きすぎるランドセルを背負った子どもたちの背中も小さな夢で風船のように膨らんでいる。街角の交差点から歩み出す人々の未来が麗しいものであるよう切に願うところだ。

その反面、春には寂しさもある。春を待たずに消えていった多くの先人たちの姿を思い出す瞬間でもある。子どもの頃、当たり前のようにいた人々も今はもういない。テレビをつければいつでも見られた岡本太郎氏、美空ひばり氏等の姿も今はない。朝まで生テレビなどで激論していた小田実氏、大島渚氏等もいない。古在由重氏、市川房枝氏、岩井章氏等々もいない。そして、周りを見渡すと、改めて思うことだが“大人がいなくなったなあ…”と。

良くも悪くも人々はものを言わなくなり、かわりに「ママ、これでいいの？」などと言う輩が日本の中枢を闊歩し戦争のできる国へ

と導こうとしている。それに対して、ハト派の人たちも本当にハトの豆鉄砲くらいのことしかできなくなってしまう。補助金をきられたらどうしよう、選挙に落ちたらどうしよう、倒産したらどうしよう、右翼がきたらどうしよう…と、どうしようだらけで尻込みし、蛸壺にでも入って隠れてしまっているようだ。

だが、逃げ隠れしたところで状況は悪くなるだけであり、良くなることは決してない。目の前で起きていることに目を背け続けたら、社会は必ず崩壊する。沖電気闘争でたたかっている田中哲朗氏が「目の前のタバコの火が消せない人に火事は消せない」と口癖のように言っているが本当にそうだと思う。

現代社会で起きている問題を本当に解決しようと動いたら、決して自分の周りだけの問題として収まることはない。自民党、公明党、日本経団連、商工会、警察、自衛隊と話しをつけていかなければ物事は進まない。敵というラベリングをするだけなら、残された道は内戦に近づくことになるのではと危惧するところだ。

非正規雇用労働者の人数は労働者全体の3割を超え、益々増加の傾向にあるが、労働条件の厳しい夜勤や重労働の現場に行けば行くほど、非正規雇用労働者は元自衛官、元警官、

# お花見



杜 海樹

元受刑者が占めている割合が少なくなってきた。少なくないというよりは、それ以外の人は仕事が勤まらず脱落してしまい、仕事が続くのは元自衛官、元警官くらいしかないと言った方が正確なのかもしれない。筆者自身の夜勤時代の同僚も、潜水艦の元運転手、戦車の元運転手等々であり、元一部上場の会社員などは3日と居た試しがないというのが正直なところであった。ここ10数年の間に、いわゆる普通のサラリーマンの生きる力が極端に弱まってしまっていると実感しているのだが、それは筆者だけの思い違いであろうか？

さて、話しを最初に戻すが、文の冒頭、春になると花が咲き、花を目当てに蜂たちがやってくると書いた。春になると花が咲くのは当たり前であるし、蜂たちがやってくるのも当たりの話だ。特にどうという話でもない。しかし、そこでもう少し立ち止まって、花がなぜ咲くのか？と突き詰めて考えていくと、結構奥は深いものだ。何しろ花が咲くのは植物だけで動物に花が咲くということはないのだから。花が咲くライオンやゾウがいるという話しはどこにもないのであるから。動物に花は咲かないのだ。犬にも猫にも花は咲かないのだ。では、なぜ植物だけに花が咲くのか？考えれば考えるほど興味は尽きない。

現代科学における植物学者等々の見解によれば、植物に花が咲く理由は、植物は自ら足で歩いて移動することができない。だから自分で移動するのではなく、相手に近づいてもらう必要がある。そのためには目立つ必要があり、生き残るための戦略として花を咲かせているといったところらしい。そして、目立たなかった植物はやがて淘汰されて消え、目立った植物だけが生き残ってきたのだという。

詳しい研究はこれから進んでいくのであろうが、花が咲くということが植物の生存戦略であるという視点は非常に興味深い。そして、自分にできなければ相手に何かをさせて危機をのりこえるという戦略も面白いと思っている。

花見は将棋よりも戦略的と思う今日この頃、花見で萌えてみてはいかがか。

